

鳥獣の 保護管理 被害対策

ツキノワグマのモニタリング調査

～ 地域個体群の長期にわたる安定的な維持と
効果的な被害対策の確立 ～

研究の背景・目的

西中国地域(島根県、広島県、山口県)のツキノワグマは、孤立分布し、生息数が少ないことから日本版レッドデータブックにおいて「絶滅のおそれのある地域個体群」とされています。しかし、近年生息分布域が拡大し、人里付近へ出没することが多くなって、養蜂、クリ園、民家のカキなどへの被害が増加しています。そのため、適正な保護管理対策の確立が求められています。

研究方法

「特定鳥獣保護管理計画」(3県で共通の計画を策定)で求められるモニタリングのために、生息環境や生息実態を把握し、捕獲個体は解剖調査を行います。とくに、人工林などの伐採跡地や列状間伐跡地の植生調査から、クマの好適な生息環境を再生するための技術手法を確立します。各種の堅果類の種子生産量等の年変動とクマの出没状況、捕獲個体の解剖結果との関連を分析して、人里への大量出没の原因究明を行います。また、クマハギの発生原因を解明するとともに、クマハギを回避するために生分解性ネットによる被害防除の効果を検証します。

研究状況

- ①2009年度の捕獲個体の年齢構成は0～11歳、平均年齢は4.1(オス3.8、メス4.8)歳でした。捕獲区分別の平均年齢は、有害捕獲個体は7.0(オス11.0、メス3.0)歳、錯誤捕獲個体は3.5(オス3.0、メス4.7)歳、その他(緊急避難、交通事故)は4.5(オス2.0、メス7.0)歳でした(図1)。
- ②2009年度の堅果類や液果類の豊凶は豊作～並作でした。林道等で採取した糞からは、4～5月にはハナウドや双子葉植物、9～10月には堅果類やミズキ、クマノミズキ、ヤマボウシ、イソノキ、クロモジ、アオハダおよびサルナシなどの液果類を多く認めました。そのため、人里へは少ない出没年でした。
- ③クマハギ被害林に設定した調査プロット内での新たなクマハギの発生はありませんでした。また、防除試験地においても新たな被害は発生しませんでした(図2)。

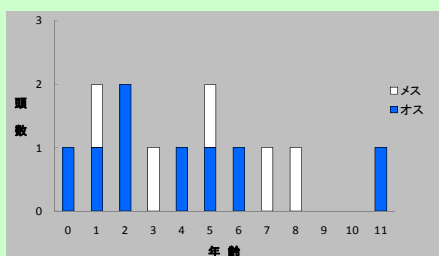


図1 2009年度の捕獲個体の年齢構成



図2 生分解性ネットによる防除試験林

研究の現場移転(成果-技術-の移転先・対象の量など)

- ①大量出没の原因を究明し、「特定鳥獣保護管理計画」にフィードバックして、適切な保護管理技術とクマの好適な森林環境整備の手法を確立できます。
- ②近年発生したクマハギの発生動向を把握し、発生原因を究明すると共に、生分解性ネットを用いた環境面も考慮した防除方法を確立できます。



MOUNTAINOUS REGION RESEARCH CENTER
島根県 中山間地域研究センター

〒690-3405 島根県飯石郡飯南町上来島1207 問い合わせ先 0854-76-3819

Mail: chusankan@pref.shimane.lg.jp

所属グループ 鳥獣対策グループ

担当研究者 澤田 誠吾(さわだ せいご)

試験研究課題名: ツキノワグマの保護管理と被害対策のモニタリング調査(研究期間:H21～23)